

聴覚障害者への相談支援における 文化モデルアプローチの一考察 —具体例から考察する文化モデル視点への転換—

A Study of the Cultural Model Approach of Social Work with Deaf and Hard of Hearing People

原 順 子
Junko HARA

<要旨>

昨今、欧米、特にアメリカやイギリスにおいては、聴覚障害者のろう文化について論じられることが多くなっており、聴覚障害者にとって重要なキーワードとなっている。筆者は聴覚障害者への相談支援において、このろう文化を基盤にした文化モデルアプローチが重要であると捉えている。本稿では聴覚障害者への相談支援を行っている職員を対象に、聴覚障害者についての障害者観を調査し、ろう文化についての認識、聴覚障害者に対してのポジティブな視点のあり方を考察した。具体的には、聴覚障害者をどのように聴者に説明するかについて記述してもらい、その中から聴覚障害者の文化モデルに基づく内容を抽出した。次に、文化モデルアプローチについて筆者が講演をおこなった後に、ネガティブな記述内容をポジティブな視点に転換するワークショップをおこなった。その結果、具体的な文化モデルアプローチの内容を明らかにすることができ、且つ、文化モデルアプローチは聴覚障害者についての障害者観をポジティブに捉えることが可能となり、聴覚障害者のストレングスをより強固にアセスメントできることが考察できた。

キーワード：聴覚障害ソーシャルワーク、文化モデルアプローチ、ストレングス視点
聴覚障害者、ろう文化

1. はじめに

障害者権利条約が2014年にわが国で批准され、そして障害者差別解消法が2016年4月より施行となり、障害者に関する施策において大きな前進がみられるところである。これらの変化には、障害者へのまなざしが大きく変わってきたことが大きく影響しているの言うまでもない。障害は障害者をとりまく周りの環境が変われば、その障害といわれる状況が軽減されるという、すなわち障害は個人の問題ではなく社会が障害をつくっているのだとする障害の社会モデルの登場により大きく変化してきた。

聴覚障害者についても社会モデルで語られることは勿論あるのだが、彼らには「手話」という独自の言語を有することから、独自の文化が構築されるという「ろう文化」で語られること

が多い。聴覚障害者のみがろう文化を基盤とする文化モデルで語られることについてはさまざまな論議がわが国にはある（現代思想編集部編2000）が、聴覚障害者を文化モデルで語ることについて筆者は重要視している（原 2015）。

本研究では、この文化モデルでの視点が相談支援においてクライアントをストレングス視点でアセスメントできることでエンパワメントすることになり、加えて誤解を受けやすい聴覚障害者へのポジティブな理解につながるということを明確にしたいと考えている。

2. 研究の目的

聴覚障害者の実態は多様であり、そしてマイノリティである。聞こえる者（以下、聴者）にとって聞こえないことを理解することは非常に難しい。それ故に、聴覚障害者は誤解を受けやすい障害でもある。Lane（1992＝長瀬2007：66）は、専門的文献に書かれたろう者¹⁾についての記述をまとめているが、それによるとろう者の傾向として、非常にネガティブなことが書かれていると指摘している。例えば、社会性については依存的、道徳性の未発達、社会性の欠如、認識面では自己中心的、自己認識希薄、非知性的、行動面では攻撃的、運動神経が鈍い、頑固、疑い深い、情緒面では未熟、苛立ちやすい、精神病的反応といったように、何を根拠にしているのかと啞然となるが、非常にネガティブな捉え方をしているという。Lane がこの情報を書いたのが1992年で随分前の話であるが、筆者もその当時は聴覚障害者に関するネガティブな捉え方をよく聞いたことがある。

それ故に、筆者が提唱している文化モデルアプローチにより聴覚障害者の特性を具体的に明らかにすることで、聴覚障害者への正しい認識ができるようにすることを研究の目的としている。具体的には、聴覚障害者をよく知らない聴者に対して、聴覚障害者をどのように説明していくかをテーマにして研究を進めていく。

3. 研究方法

聴覚障害者への相談支援をおこなっている職員を対象に、筆者がおこなった講演時にワークショップを実施した。

講演のテーマは「聴覚障害者へのソーシャルワークー文化モデルアプローチの重要性ー」である。講演の前半には、聴覚障害者へのソーシャルワークの枠組みや聴覚障害者を対象とするソーシャルワーカーに求められるコンピテンスについて説明し、この前半部分を終了した後【ワークショップ1】を実施した。【ワークショップ1】の内容は、「聴覚障害者」についてよく知らない聴者に対して聴覚障害者をどのように説明するか、具体的に説明する内容をポストイットに記述するという方法で、参加者の聴覚障害者についてのまなざしを明確にすることとした。

【ワークショップ1】の下記の内容をパワーポイントに提示し、質問をおこなった。

質問、「聴覚障害者」についてよく知らない聴者に対して、あなたはどのように説明しますか？

- 1) 聴覚障害の特性や、生活習慣など何でも思いつくことを書いてください。
- 2) 考えられるだけたくさん書いてください。
- 3) 1枚の紙に1つの事柄を書いてください。

例、手話でコミュニケーションする。

聴覚障害者の実態は多様であるため、このような質問をすると想起する聴覚障害者の実像が大きくなりすぎ、かえって混乱を招くことにもなりがちである。また講演の中での限定的な時間のなかでのワークショップであるため、以下のような具体事例をパワーポイントにて提示した。以下の2事例は、具体事例を想起するために筆者が提示したものである。

<事例1>

ある会社で働いているAさんは、第一言語は手話です。会社の人事課の方が、「Aさんについて困っていることがある。」と、相談に来られました。

- ◆Aさんは上司に対して挨拶する時も、友達のようににこっと笑って手を挙げるだけ。
 - ◆筆談で仕事を指示しても、通じないことがある。
 - ◆周りの人がどんなに忙しくしていても、自分は時間になったからと帰ってしまう。
- 周りへの気遣いができず、人間関係を壊してしまうこともある。困っています…。あなたは人事課の方に、Aさんについてどのように説明しますか？

<事例2>

ご近所の回覧板が、自分の家に届けられていないというBさん。どうやら自分の家だけとばされていて、見るができない。近所の役員に苦情を言うと、「あなたは見てもわからないから。」と言われたと、相談に来られました。

あなたはご近所の方たちに、Bさんについてどのように説明しますか？

【ワークショップ1】の終了後、講演を続行。（講演内容は、「5. 文化モデルアプローチ」を参照）

続いて以下のように【ワークショップ2】を実施した。

【ワークショップ2】

- 1) ポストイットに書いた文章をチェックしてください。
- 2) 医学モデルや欠損モデルに基づく視点で書いた文章があれば、修正を試みてください。ポストイットの空白部分に加筆してください。
- 3) 差支えなければ、次の項目を書いて、講師に提出してください。講演後に回収しますので、机の上に残しておいてください。

①仕事の内容（職種） ②聴覚障害者へ相談業務歴 ③年齢（〇〇歳代）例、40歳代 ④取得している資格名

本研究の趣旨を説明し、研究に協力いただける場合は、記述済みのポストイットは机に置いたままにすることを依頼した。研究結果を公表する場合は、個人が特定されることがなく、記載内容は勿論のこと、個人に関わる情報についての扱いには十分注意することを説明した。研究の趣旨に賛同いただける場合のみを対象とし、強制するものではないことを再度説明した。

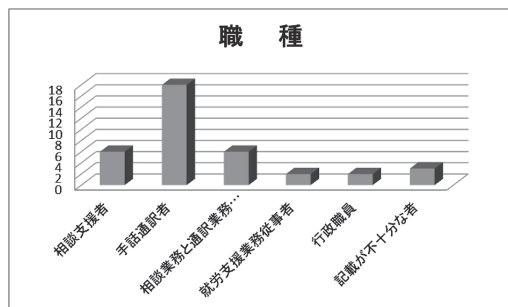
4. 研究協力者の属性

本研究の協力者は37人であった。以下に研究協力者の属性について説明する。

①仕事の内容（職種）

（表1）職種

相談支援者	6
手話通訳者	18
相談業務と通訳業務の兼務者	6
就労支援業務従事者	2
行政職員	2
記載が不十分な者	3
計	37人



研究協力者37人中、相談支援業務を行っているのは6人で、その内訳はろうあ者相談員が5人、相談支援専門員が1人であった。手話通訳者は18人で、専任手話通訳者が6人、設置手話通訳者が11人、手話通訳コーディネーターが1人であった。本研究は聴覚障害者への相談支援をテーマとしているので、本来ならば手話通訳者の業務は相談支援業務ではないが、実態としては手話通訳時に相談支援も行っている実態があることや、相談支援をメインテーマとした筆者の講演に自主的に参加したことからも本研究の対象者にとらえた。以上とは別に相談業務と通訳業務を兼務していると記載したものは6人であった。

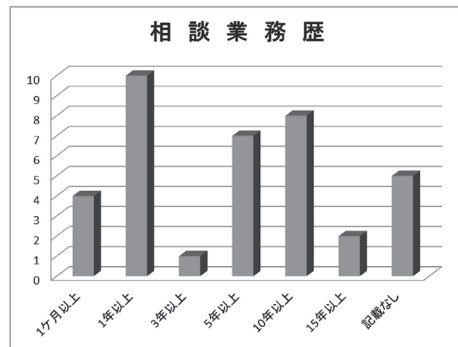
就労支援業務従事者は2人で、サービス管理責任者1人、就労支援員が1人であった。行政職員は2人で、属性の記載が不十分な者は3人であった。

②聴覚障害者への相談業務歴

一番長い相談業務歴をもつ者は16年で、最短は1か月であった。1年以上が10人で一番多く、次いで10年以上が8人であった。記載なしが5人いたが、手話通訳業務のみの研究協力者であった。

(表2) 相談業務歴

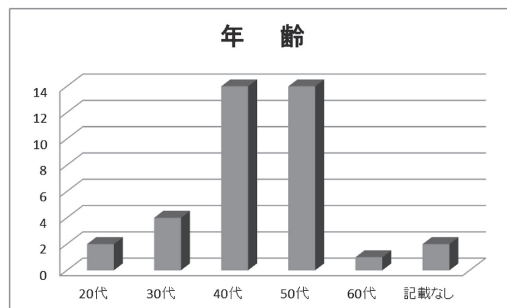
1ヶ月以上	4
1年以上	10
3年以上	1
5年以上	7
10年以上	8
15年以上	2
記載なし	5
計	37人



③年齢

(表3) 年齢

20代	2
30代	4
40代	14
50代	14
60代	1
記載なし	2
計	37人



一番多いのは40代50代で、それぞれ14人である。

④取得している資格名

参加者の取得資格はさまざまであり、現職に関係しない資格名も書かれていた。本研究では取得資格と文化モデルアプローチの関係性には言及しないので、記載されていた資格名のうち、社会福祉関係の資格名のみを表4に示した。

(表4) 取得資格

社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、手話通訳士、相談支援専門員
盲ろう通訳介助員、サービス管理責任者、同行援護（盲ろう者）、ジョブコーチ

5. 文化モデルアプローチについて

研究協力者を対象に筆者がおこなった講演のうち、「文化モデルアプローチ」に関する内容

の概略を以下に記す。

まず、障害者観が時代と共に変遷してきたことを説明し、その変遷は聴覚障害者も同様であり、医学の進歩により聴覚病理の認知と発見が可能になったことで、「聾」への医療的試みが行われるようになったことを話した。例えば、感音性難聴の治療や人工内耳の埋込手術である。

次に障害学でのモデル理論を紹介し、障害の医学モデル・欠損モデル・個人モデルから、障害の社会モデルや文化モデルが登場したことを説明した。社会モデルについては星加（2007）の「障害の社会モデルとは、障害の問題とはまず障害者が経験する社会的不利のことであり、その原因は社会にあるとする、障害者解放の理論的枠組みである。」を紹介し説明をおこなった。

聴覚障害者に関してもモデル理論で説明し、医療的試みをおこなうのは疾病モデル、病理モデル、医学モデル、欠損モデル等と呼ばれるものであり、それに対して文化モデルについては、デフコミュニティのメンバーが、共有の歴史、認識傾向、共通の習慣、共通の感覚、日本手話で構成される「ろう文化」をもつものであることを紹介した。これらの障害観の変遷は、病理的視点から文化的視点に基づくものへの変遷であることを述べた。

さらにろう文化の説明をおこない、ろう文化の例を具体的に説明した。例えば、人や物を指すときに指差しで示す。二人称であっても、指差しをする。人を呼ぶときに電気をつけたり、消したりする。または、テーブルを軽く叩く、床をどんどん踏み鳴らす（振動で呼ぶ）。話す時はアイ・コンタクトを重視する。飲食店等で店員を呼ぶ際には大きな音で手を叩くか、手をあげて大きく振る。点滅などで知らせるドアベルやベビーシグナルの活用。騒音の激しい大都市で離れていても手話で会話が可能である。遅くても知人をアポなしで訪ねる事が多いが、電話が使えなかったためである。最近ではコンピュータによるテレビ電話の普及により、この慣習に変化があることなどを紹介した（ウィキペディア「ろう文化」）。

これらのろう文化をもつ聴覚障害者を、「デフフッド」という共通のアイデンティティをもつ用語を提唱しているLadd（2003）についても紹介した。

このように聴覚障害者には「ろう文化」という独自のアイデンティティをもつコミュニティが存在することで、聴覚障害者を対象とする聴覚障害ソーシャルワークにおいても、多数派である聴者の聴文化に対して、少数派である聴覚障害者の＜ろう文化＞に関する視点が不可欠であり、それを基盤とする支援として「文化モデルアプローチ」が構築される（原2015）と説明した。文化モデルアプローチは有効な支援アプローチであり、クライアントをストレングス視点で理解することが可能となる。例えば、聴覚障害の特性を説明する時に、医学モデル・欠損モデルで説明すると、「聞こえないから説明してあげてください。」「聴覚障害者は〇〇〇ができない人」とネガティブな説明になるが、文化モデルで説明すると、「筆談すればOKです。」

「聞こえない人の文化と聞こえる人の文化に違いがあります。」とポジティブになることを説明した。

以上のように文化モデルアプローチを説明した後に、【ワークショップ2】を実施した。

6. 調査結果（研究協力者の記述内容）

6-1. ポジティブな記述内容

筆者が【ワークショップ2】で文化モデルアプローチを説明する前に、既にポジティブな記述があったものを表5に示す。これらの記述をしていたのは研究協力者37人中18人（1項目でも記述があった者を含む）で、全体の48.6%であった。

記述内容を精査すると、1）「ろう文化」についての記述があるもの、2）内容が「ろう文化」であるもの、3）その他、の3分類になり、2）についてはさらに①視覚重視の文化の内容②手話の記述、③「ろう文化」の生活様式に関する記述に分けることができた。

表5に示すように、ポジティブな記述内容として「ろう文化」に関する記述があった研究協力者は、職種、相談業務歴、資格において顕著な関連はなく、相談業務歴が長くてもポジティブな記述がない研究協力者もあり、属性との顕著な関係性は今回の調査では見られなかった。

（表5）ポジティブな記述内容

1) <ろう文化についての記述>

- ・ ろう文化であることの理解について説明する。 ・ ろう文化の理解。
- ・ ろう者特有の文化がある。 ・ ろう者独自の文化がある。
- ・ ろう者特有のろう文化を持っている聴覚障害者は、健聴者とは異なる文化を持っている。
- ・ ろう者独特の文化をもっている人もいる。生活習慣も様々。
- ・ きこえる人ときこえない人は、同じ日本人でも文化が異なる。
- ・ 手話の世界では「にこっと笑って手を挙げる」ことはきちんとしたあいさつ。手話の文化。
- ・ 健聴者の文化と違う（礼儀などが）。 ・ ろう文化と健聴者の文化の違い（あいさつの仕方など）
- ・ 気遣いやマナーの面で、聴者社会と異なる点があるため、聴覚障害者に対する文化の理解が必要。
- ・ 失礼なことではなく、「文化のズレ」だと、Aさんと一緒に説明しに行く。

2) <内容がろう文化である記述>

①視覚重視の文化の内容

- ・ 目で見て観察する力がすごい。 ・ 視覚的に優れている人が多い。
- ・ 表情が大切。視線は下げない。見て確認する。 ・ 判断する時は、視覚的情報が全て。
- ・ 地図を書くのが上手な人が多い。 ・ 観察力が鋭い。よく見ている。
- ・ 手話にこだわらなくても、身振り、空文字、筆談、表情でOK。
- ・ 観察力がすごい。 ・ 見てわかる情報が大事。
- ・ 目から情報を得ることが多い。目で見てわかる情報は良く見ている。メールやインターネット、PC、スマホ、タブレットなど得意である。

②手話の記述

- ・ 手話と日本語は別の言語である。 ・ 手話通訳を使うことで聴者と充分にやりとりができる。
- ・ 手話でコミュニケーションする方です。

③ろう文化の生活様式に関する記述

- ・ ろう者の「あいさつ」それが普通。ろう者では一般的なあいさつ。
- ・ よびかける時に、声だと気づかないので、肩をたたいたり、視界に入ったりしてよびかける。
- ・ Aさんは挨拶する時に、手を挙げるだけと話がありましたが、聴覚障害者（ろう者）のコミュニティでは、そのように挨拶をされる場合もあります。
- ・ 聞こえない人同士のあいさつは、手を上げることが多い。
- ・ 表情や手の動きであいさつするので、上司を友人あつかいしている訳ではない。

- ・ 第一言語が手話の聴覚障害者は、書記日本語は第2言語である。

3) その他

- ・ 想像力が豊か。良い意味でも、悪い意味でも。 ・ 耳が聞こえなくてもできることはたくさんある。
- ・ ○×白黒がハッキリしている。 ・ きちんと説明をすれば、理解できる。(簡潔な方法で)
- ・ 聴覚障害者の特性を話しする。 ・ 健聴だけが努力するのではなく、お互いの努力で課題は解決される。
- ・ ろう者はろう学校単位でコミュニティが作られてきた。

6-2. ネガティブからポジティブへの転換

次に示す調査結果(表6)は、文化モデルアプローチに関する筆者の説明を聞いた後に、研究協力者が【ワークショップ1】で記述したネガティブな内容を、【ワークショップ2】でポジティブな内容に書き直したものの一覧表である。

研究協力者37人が記述したポストイットの総数は328枚で、1人平均8.9枚であった。表6に示したネガティブからポジティブに転換できた記述は35枚の記述分である。この35枚の記述は明確に転換例が書かれてあるものだけを抽出したため少ない数となっている。表6の掲載例以外の転換例もあったが、今回の研究は研究協力者が筆者の講演を聞いてポジティブに転換できた比率を研究対象とはしていないので、明確な転換例のみを表6に掲載した。

(表6) ネガティブからポジティブに変更した記述内容

【ワークショップ1】での記述 ネガティブな記述内容	【ワークショップ2】で変更した記述 ポジティブな記述内容
・ 聞こえる人との関わりが少ない。	➡ “ろう文化”で育ったから。
・ 会社での自分の振舞いは普通と思っている。 (問題視されていることがわからない)	➡ “ろう文化”の普通の振舞い(手を挙げてニコリする、など)だから。
・ コミュニケーションがとれないため、周りの人と人間関係をうまく築けない人がいる。	➡ 周りとのコミュニケーション手段が異なるため、周りの人と人間関係がうまく築けない人がいる。周りの人が手話ができれば、コミュニケーションがスムーズにできる。
・ 手話で生活している人の中には、文章が苦手な人がいる。	➡ 手話が第一言語であるため、文章が苦手な人がいる。
・ 長い文章の読み書きは苦手な人が多い	➡ 短い文章ならわかる。手話で十分に語ることができる。
・ 手話を知らない聴者に対して気持ちを伝えられない。	➡ 通訳者を介すと気持ちを伝えやすい。
・ 筆談(文章理解)に個人差がある。	➡ 絵や身ぶりも交えて、わかりやすい言葉で伝えると伝わりやすい。
・ 聴こえない、聴こえにくい障害である。	➡ 情報保障があれば聴こえる人と同じ生活ができる。
・ テレビの音を消して映像だけ見ると同じ世界にいる。	➡ 字幕があればテレビも一緒に楽しめる。
・ 日本語は十分理解できない人もいる。理解の程度も様々。	➡ 手話でならば理解できる。
・ 筆談では通じない時がある。	➡ 簡潔に書いてくださればよくわかります。

・耳が聞こえないために、音声言語でしゃべることができない人もいます。	➡	声は出ませんが筆談できます。
・視覚でしか情報を得られない。	➡	視覚で情報を得られる。
・相手の声や言い方に感情がこもっている事に気がつかない。	➡	音声による情報は入らないですが、別の方法でならでる。
・日本語で育っていないので、日本語での難しい説明が理解しにくい人もいます。	➡	理解しやすいコミュニケーション方法が個々にある。
・社会性を身につける経験がない。	➡	音のない世界で生きてきている。
・相手の顔、表情など外見をみて誤解しやすい。疑い深い。	➡	顔を見て話せば、気持ちが通じる方なので、面と向かってほしい。
・日本語が苦手である。	➡	手話が第一言語である。
・仕事に集中していると周りの事に気がつかない。	➡	忙しいこと（残業が必要）など伝えてください。
・（耳から情報が入らない）周りの様子がつかみにくい。	➡	周りの様子を筆談などで伝えてください。
・聞こえない方にも、いろいろな方がおられる。	➡	聞こえる人と同じでいろいろな方がいます。
・耳から言葉が入らないと、コミュニケーション能力として、日本語を獲得することが難しくなる。	➡	第一言語は手話です。
・聴者の世界で生活するろう者は、やりとりの会話がわからない場合が多いのですが、わからないと嫌な顔をされるので、ついわかったふりをします。	➡	聴者に合わせようとがんばっています。
・聴者に対してコンプレックスを持つ人もいます。	➡	聴者とろう者の文化は異なる。
・知りたくても手話通訳者がいないので、知識を得ることができない。	➡	手話通訳者をつけたら、いろいろ知識を得られます。
・口話では通じないことがある。	➡	口話は音声日本語であり、聴覚障害者は見てわかる方法が適切である。
・聴覚障害者といっても、みんなが手話を理解しているわけではない。	➡	聴覚障害者であっても、音声日本語の中で育った人もいます。
・筆談では分かりにくい人がいる。	➡	日本語と手話は別な言語だから、筆談では分かりにくい人がいる。
・耳からの情報が入らないため、周りの雰囲気などつかみにくい。	➡	自分の仕事に集中していると、周りの雰囲気に気づきにくい。
・障害の説明をする。理解を求める。	➡	文化が違うんですよと促す。
・日本語の長い説明文はわかりにくい、理解しにくい。	➡	Yes、Noをはっきりすれば、理解できます。
・見える事例は理解しやすいが、見えないものごとは理解しづらい。	➡	ろうの方の生活における文化の違いを説明する。
・生い立ちなどで自然と健聴者文化が身につかない。	➡	ろう文化の中で育っている。
・自分から周りの情報をあつめるにも手話によるコミュニケーション関係がない限り、なかなかむずかしい（自然と把握することはむずかしい）	➡	手話でのコミュニケーションができていれば、よりコミュニケーションが円滑にできるようになるかもしれません。
・長い間積み重ねられる情報が、聞こえる人と比べて非常に少ない。	➡	ろうの社会や当事者団体などでの手話コミュニケーションから、いろいろな情報は積み重ねられて、そこからマナーも身についてくる。

7. 研究結果と考察

今回の【ワークショップ1】【ワークショップ2】を実施して明らかになったのは、以下の2点である。

①筆者が講演の中で文化モデルアプローチを説明しなくても、文化モデルアプローチに関する何らかの記述をしている研究協力者が37人中18人いた。

②筆者の講演を聞いた後に、ネガティブな視点からポジティブな記述に転換例を示すことができた研究協力者は37人中20人いた。

ただし、①と②についての研究協力者の属性との関連については、今回の調査では明確にはしていない。また、①②の両方に該当しないものが5人いたが、これについても検討はしていない。

8. まとめ

冒頭にも述べたように、聴覚障害者のろう文化に関する議論においては、わが国では賛否両論ある。その分析は別の機会に明確にしたいと考えているが、今回のワークショップでの結果と考察からは、ろう文化を基盤とした文化モデルアプローチで聴覚障害者のクライアントを捉えることは、クライアントへのストレングス視点でのアセスメントにつながり、とても重要なアプローチであることがわかった。また、聴者が聴覚障害者をポジティブに捉えることにもなり、障害者観の転換にもなりえることが示唆された。

今回の調査研究は、研究協力者の人数が37人と少ないこと、職種・相談業務歴・取得資格との関連性を考察できていないなどの課題が残っている。また、文化モデルアプローチで説明できない内容についての考察はできていない。これらは今後の課題として研究を継続していきたい。

注

- 1) ろう者とは第一言語が手話であり、デフコミュニティにアイデンティティをもっている人たちをいう。本研究では聴覚障害者と表記しているが、難聴者の中にもろう者としてのアイデンティティをもつ者もいるので、広くとらえて聴覚障害者を使用している。

引用文献

ウィキペディア（アクセス日2016.3.31）ろう文化

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%8D%E3%81%86%E6%96%87%E5%8C%96>

現代思想編集部編（2000）『ろう文化』青土社。

原 順子（2011a）「文化モデルアプローチによる聴覚障がい者への就労支援に関する考察ーソーシャルワーカーに求められるろう文化視点ー」『社会福祉学』51(4), 57-68.

原 順子（2011b）「聴覚障害ソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスに関する一考察」『四天王寺大学紀要』52, 87-97.

原 順子（2013）「聴覚障害者への相談支援におけるソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスに関する質的研究」『四天王寺大学紀要』55, 111-126.

- 原 順子 (2015) 『聴覚障害者へのソーシャルワーク – 専門性の構築をめざして』 明石書店.
- 星加良司 (2007) 『障害とは何かーディスアビリティの社会理論に向けて』 生活書院.
- Ladd, P. (2003) *Understanding Deaf Culture : In Search of Deafhood*, Multilingual Matters Ltd. (=2007, 森 壮也
監訳 『ろう文化の歴史と展望 – ろうコミュニティの脱植民地化-』 明石書店.)
- Lane, H. (1992) *The Mask of Benevolence : Disabling the Deaf Community*, Dawnsign press. (=長瀬 修 (2007)
『善意の仮面 – 聴能主義とろう文化の闘い』 現代書館.

